



Title	<書評>茶園敏美『もうひとつの占領 セックスというコンタクト・ゾーンから』
Author(s)	鹿野, 由行
Citation	日本学報. 2019, 38, p. 152-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書評】

茶園敏美『もうひとつの占領 セックスというコンタクト・ゾーンから』

鹿野由行

本書は敗戦後の日本において、戦勝国アメリカの占領兵との非対称的な権力関係のなかで、占領兵と性的な関係にあった女性たちの生存戦略を丹念に分析し明らかにしている。占領兵と性的な関係にあった女性たちは、「娼婦」や「戦勝者に寝返った女」というスティグマを負わされ、パンパンと呼ばれていた。著者は、当時パンパンと呼ばれた彼女たちが現在においても公に記憶を語ることができないのは、「聞き手側のわたしたち」を含む社会全体のスティグマ化と連動していることを指摘したうえで、彼女たちのエイジェンシー（行為主体性）に注目して論を進めている。本稿では、本書の概要を紹介したうえで、本書の論点と意義、そしてそこから開かれる今後の可能性について述べていきたい。

本書は「はじめに」と「おわりに」を除いて全14章（全VI部）で構成されている。以下、各部ごとに紹介していく。

「はじめに」と第1章では、本書の課題と分析対象やその手法、用語の説明、時代や制度的背景について記述されている。本書は、京都社会研究所の報告書『街娼 その実態と手記』（1949年）とGHQの報告書という限られた史資料を用いながら、西川祐子の『古都の占領』（2017年）を拠りどころとして京都と神戸のフィールドワークを行い、パンパンと呼ばれた女性たちの声に耳を傾けていく。これらのデータを「うえの式質的分析法」という帰納法分析を用いて、第二次大戦中のヨーロッパにおける兵士と女性の性的接触についての研究と「類似例比較」を行いながら、彼女たちの生存戦略を明らかにしている。その際に、占領兵と女性が相互交渉を行う空間そのものを「コンタクト・ゾーン」という概念を用いてとらえていくことで、女性の「自発的な関係」に積極的な意味を読み込んでいく。

第I部「レイプの生存戦略」では、レイプという性暴力にさらされた女性たちの抵抗について記されている。著者は、彼女たちは「性的に無垢であってなおかつ、激しく抵抗をしたと語る」（p.61）ことで「モデル被害者」に自らを位置付けていたことを指摘している。

また本書において著者は、金銭を受け取った、あるいは要求することができることを知った女性たちに積極的な意味を見出している。そこでは、理想的な被害者の語りのみを被害者に押し付け、そのみを受け取る社会そのものへの異議申し立てになりうる可能性でもあることが指摘されている。

第Ⅱ部「売買春の生存戦略」は、占領兵と関係をもつ彼女たちがただ一方的に搾取されているのではなく、自らの能力や立場を積極的に利用して生き延びようとしていた事例が示されている。遊郭に身売りされた際の借金を占領兵に身請けされオンリー（特定の兵士一人とのみ関係を持つこと・者）となることで返済した者や、日本人調査員に対して好印象を与えることを目論む者など複数の事例が登場する。後者の事例からは、日本人男性との結婚願望の語りが、日本人調査員に「更生」可能であるという好印象をもたらすという重要な役割を果たしていることが読み取れる。ここでは占領兵を「金づる」として扱ったという著者の読み解きと、調査員の「更生」可能だという印象が並列されている。この問題については後半で再度取り上げたい。

報告書『街娼 その実態と手記』に記述されている63名の女性の語りは、その大部分が恋愛に関するものだという。第Ⅲ部「恋愛の生存戦略」では、恋愛という関係性を占領兵との間に見出しながら、彼女たちが何を語っていたのかについての読み解きが試みられている。第Ⅲ部で語られる恋愛とは、占領兵との恋愛を生活していくための手段としてとらえている女性たちばかりではない。恋愛を「収入」を得る手段の一つとしてとらえて喫茶店やダンスホールなどの仕事をかけ持つ者の事例が記されており、「収入」のための恋愛から結婚を前提とする恋愛まで、幅広い意味を含む実践としてとらえられている。

第Ⅳ部「結婚の生存戦略」では、結婚をめぐる「占領兵から結婚の約束を引き出す女性」と、「占領兵のプロポーズをかわす女性」の大きく二つに分類される。両者に共通する特徴として、占領兵からプロポーズを受けた女性は、一名の事例を除いて全て女性の実家（あるいは養家）が裕福なことが挙げられ、金銭的な援助を求めていることが多い。だが「プロポーズをかわす女性」の事例として登場する、家族のため金品援助の目的で交際を続けている者や、交際相手を変え続けている者について、彼女たちが事後的に構築された社会的に受容可能な動機として語っている可能性に触れながら、プロポーズをかわすことそのものが占領地女性と占領兵という非対称な権力関係の中で行うことができる「精一杯の異議申し立てであり、限られた生存戦略」であった（p.121）。

第Ⅴ部「性暴力連続体での生存戦略」のタイトルにもなっている性暴力連続体とは、リズ・ケリーによって提示された概念であり、被虐待女性たちにとってレイプ／売買春／恋愛／結婚は「圧力による選択から力による強制までの連続体上に存在」するという（p.124）。ここでは、レイプされた後にその相手のオンリーとなったことで「レイプされたあげくにパンパンになった」という社会的なスティグマ化を逃れた者や、占領兵と関係を持った後に厳しすぎる養母から逃げ出して次々と占領兵を手玉にする女性が登場する。彼女たちが

含め占領兵と関係を持つ女性たちを、筆者は性暴力連続体上に位置付けて分析する。それは彼女たちの置かれた状況や選択もまた、構造的な暴力にさらされているからである。

第Ⅵ部「占領兵との婚姻と混血児をめぐって」では、占領兵とのロマンスを公に語ることができる女性とできない女性の差について言及されている。そこには、勝者である「紳士」に選ばれて婚姻に至った者と、貞操を失い「男に捨てられ」た「元バンパン」という複数のスティグマを負わされるという決定的な差異が存在するが、「社会に受容される経験でない限り、その経験は語るができない」からこそ、彼女たちはただ口を閉ざすのである(p.160)。次に、占領兵との間に生まれた子供とシングルマザーについての章が続く。ここでは父親の人種による違いによって社会の扱いが大きく異なることが指摘されている。まず一点目は、日系兵士など「黄色系」は統計から除外され、経験そのものの欠如である。二点目は、黒人の混血児にネガティブなイメージを負わせた上で、母親を非難するような黒人兵の子供とその母親に対する差別的なまなざしである。

「おわりに」では、本書の全体のまとめと今後の課題が記されている。本書では類似例比較として、第二次大戦中のドイツ軍占領地域と占領地日本が対比されている。著者はフランスにおけるドイツ軍兵士とフランス人女性との間に生まれた「ボッシュ(ドイツ野郎)の子」との比較において、日本の「バンパンの子」は経験の再定義ができていないために、自らの経験を語ることができていないと指摘した上で、「注意深く共感的な聞き手の存在」の重要性を強調している。この聞き手の存在によってはじめて、バンパンや「バンパンの子」たちは自らの経験を語ることが可能になり、またその経験と語りそのものが彼女たちの名誉回復をもたらす可能性をも秘めているのである(p.210)。

本書では、敗戦後の日本においてバンパンと呼ばれた女性たちに寄り添い、その語りに耳を傾けながらエイジェンシーを読み解いている。著者は前著『バンパンとは誰なのかーキャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』(2014年)において、「お姉さま方」の語られない思いに寄り添うために、著者自身の事故による嗅覚障害の経験と重ねながら、彼女たちの仮名に花の名前を使用している。日高由貴は前著への書評の中で、この表現方法に「あらたな暴力を自覚的に引き受けようとする意志」を読み取り、新しい視点と可能性を見出している(日高 2016)。この手法は本書でも用いられており、本書は前著から一貫した寄り添いのさらなる発展としてとらえられる。

本書は、前著でも用いた資料を丹念に読み込み女性たちの性を掘り上げながら、セクシュアリティを地図に落とし込むことで、占領下京都における都市の中の性を浮かび上がらせた点に特徴がある。彼女たちを性暴力の被害者として一元化し、占領兵とのジェンダー差を占領／被占領の対比としてそのままスライドさせて論じるのではなく、エイジェンシーに着目することで女性たちの置かれた暴力の複数性とその抵抗の戦略の重層性を、地図と資料とインタビューという複数の資料を用いて立体的にとらえることを試みている。そ

れを可能にしているのが「相互作用、理解と実践がつながるような観点」を持つ「コンタクト・ゾーン」という分析概念である (p.17)。著者自身が徹底して寄り添う「注意深く共感的な聞き手」の一人となっているからこそ、語ることができない彼女たちの経験が本書の中で解かれているのであり、またエイジェンシーを持つ一人の女性として再措定されているといえるだろう。

本書の重要性や視点の新しさは十分に評価されるべきであるが、本書についてはすでにいくつかの書評など一定の蓄積がある (金井 2018, 米田 2018)。そのため、ここからは現在のセクシュアリティ研究を踏まえ、別の角度から本書への応答をこころみたい。

ここでは三つの点に言及したい。まず一点目は、分析手法と社会構造についてである。本書は、「うえの式質的分析法」によって事例を分類し、橋本明子 (2017) の「類似例比較」を用いて、ドイツやフランスの占領下における性暴力との類似性を示している。橋本は「記憶の文化」をたどり、「各国の敗戦文化や文化的トラウマに宿る意味の共通点を探る」ために国際的な比較を行い、研究の蓄積が豊富なドイツの事例を用いて戦後日本を分析しており、本書に通じる点も多い。

しかし、本書ではドイツやフランスの事例がやや唐突に用いられているように感じられる。本書では「パンパンの子」と「ボッシュの子」が類似の事例として取り上げられ、比較されている。「ボッシュの子」とはドイツ軍占領下のフランスにおいてドイツ兵とフランス女性の間に生まれた子供を指す。また、「ボニシュ」とはフランスに上陸したアメリカ兵と関係を持ったフランス人女性を指す。著者はパンパンと呼ばれる女性は「戦勝者に寝返った女」であり「棄てられた女」と目され、日本の家父長制に基づいた婚前に貞操を失った女性への蔑視によって、「パンパンの子たちは、ボッシュの子たちが自らの経験を語るより困難である」と指摘する。しかし、著者も記述しているように、解放後のフランスでは敵であるドイツ兵と結ばれたフランス人女性への報復として、公共の場で髪を刈り、引きずりまわすなどの制裁が行われた (クリュゲール 2007)。ここで指摘したいのは、日本のパンパン女性は戦勝者と関係を持ったのに対し、ボッシュの子の母たちは敗者と関係を持った点であり、この差は重要であると考えられる。また、白人であるフランスのボニシュやボッシュの子の母と、アジア人である日本のパンパンの子の母では、人種が異なっている点も分析上看過することはできないだろう。

次にやや似通った指摘となるが、事例として登場する女性たちの記録を読み解く際の、記録への視線についての問題である。本書で最も使用されているのは京都社会研究所の報告書『街娼』だが、記録は調査員によって行われ、また記述されている。本書では、「調査員に受容可能な動機の語彙を駆使」している女性が複数登場し、そのような語りを行わない女性に対して調査員が否定的な記述をしているという (p.128)。女性たちは調査員 (日本人男性) に向けて占領兵 (アメリカ人男性) との関係について語っている。それは占領者 (国) アメリカと被占領者 (国) 日本という二つの異なる社会、あるいは集団の重なり

合う境界に、自らが位置付けられていることを意識(あるいは無意識)的に語っていることでもあるだろう。その語りを、日本人男性が記述しているのであれば、記述の語りからエイジェンシーを読み解く際には、占領下の日本において彼女たちが置かれた立ち位置を社会構造からもとらえる必要がある。本書では、エイジェンシーを読み解くことに重点が置かれたために、調査者の主観についての問題が後景化しているように感じられてしまう。

三点目は、占領期の日本におけるセクシュアリティの多様性についてである。敗戦後の日本では、東京・上野をはじめ「女装男娼」などの「男色文化」が急激に顕在化し、1940年代後半には角達也による小説『男娼の森』が出版され広く社会に知られるようになった(三橋 2008)。三橋は、1952年の東京・有楽町界隈には主に占領兵を相手にしていたであろう約300人の街娼の中に、男娼が13人ほどいたと指摘している。また、後に東京・銀座でゲイバー『青江』を開いた青江忠一は、1952年の東京・銀座や新橋には複数のゲイバーが存在しており、そこへは「将校クラスの外人」などが出入りしていたことや、食料をPX(購買部)から買って提供していたであろうことが語られている(青江 1989)。

しかし、彼女たちについての記録や記憶はその媒体も限られたものばかりであり、学術的あるいは公的機関による記録は少ない。彼女たちの声は、売買春差別に加えて男娼という社会から周縁化されたセクシュアリティというスティグマを負わされることで、より語るができない・語るべきではない記憶として周縁に留め置かれている。彼女たちが歓楽街のある特定の空間を仕事場として共用していたのであれば、パンパン女性と男娼には何らかの仲間意識、あるいは協力関係が存在していた可能性は皆無であったとはいえないだろう。そこには共闘する生存戦略が存在していたのかもしれない。

本書では、「おわりに」の中で「ブギの女王笠置シズ子」を、「夜の女」たちが慕っていたという記事が紹介されている。自身がシングルマザーでありながら活躍する笠置の苦勞に共感して「夜の女」たちは応援するのだが、彼女たちと笠置の間には占領期を強く生き抜く女性たちの共感と連帯がある。彼女たちは笠置の「共感的な聞き手」であったと位置付けてよいだろう。たとえ同じ経験をしていないとしても、「共感的な聞き手」に開かれていく想像的な記憶の読み解きもまたあるはずである。

最後に繰り返しになるが、本書からは声に「寄り添い」、その声を「復権させたい」という強い意気込みが伝わってくる。著者のさらなる活躍、さらなる論考を期待したい。

【参考文献】

- 青江のママ 1989『地獄へ行こか青江へ行こうか 女より女らしく・青江ママのゲイ道一筋六十年』ぴいぶる社
- Hashimoto Akiko. 2015. *The Long Defeat : Cultural Trauma, Memory, and Identity in Japan*. =橋本明子 (訳 山岡由美) 2017『日本の長い戦後 敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房
- 日高由貴 2016「書評：名ざしと名づけのあわいで――あらたな関係性を紡ぐ場所としての言葉（茶園敏美『パンパンとは誰なのかーキャッチという占領期の性暴力とG1との親密性』書評）『日本学報』第35号
- Kruger Josiane. 2006. *Née d'amours interdites : Ma mère était française, mon père, soldat allemande*. =クリュゲール ジョジアヌ (訳 小沢君江) 2007『ボッシュの子ナチス・ドイツ兵とフランス人との間に生まれて』祥伝社
- 三橋順子 2008『女装と日本人』講談社現代新書
- 金井淑子 2018「長い間世間から「黙殺」されてきた「女性たちの語り」にこだわる」『読書人』2018年8月10日号 (<https://dokushojin.com/article.html?i=4042>)
- 米田佐代子 2018「もうひとつの「#Mee Too」または「#With You」の問い――茶園敏美著『もうひとつの占領―セックスというコンタクト・ゾーンから』」
(WEB サイト 『Women's Action Network』)
(<https://wan.or.jp/article/show/7939>)
(2018年10月19日最終アクセス)